

中国貴州省西南部の苗族(ミャオ族)と布依族(ブイ族)の食文化(第10報)

——台所空間——

酒井 映子・末田 香里

**Dietary Culture of the Miao and Bouyei Tribes in South-Western
Guizhou Province of P. R. China (X)**

— Kitchen Space —

Eiko SAKAI and Kaori SUEDA

は じ め に

中国貴州省西南部の少数民族である苗族と布依族の食文化の特徴を明らかにするために、台所空間から台所の機能をみることは、台所が「人々の基本的な生活行為である食べることに関係する、しかも生活文化と密着した空間概念」である¹⁾と捉えられていることなどからも、両民族における食のあり様を知ることにもなると考えられる。日本における戦後の農家世帯の台所機能は、生業形態の変化、食品産業の発展、電気やガスの調理道具の発展、家族構成や家族関係の変化などの食に関わるさまざまな要因の影響を受けて変遷してきている²⁻³⁾。かつては、原料の加工調整にはじまり、調理、貯蔵に至るまで、食品製造工程が最初から最後まで行われる場所であるとともに、家族はもちろん、近隣世帯の人々との食事を通じた語らいの場でもあるというように、台所は単に食べ物を料理する場所に止まらず、台所の機能が多岐にわたっていた。しかし、近年では非農家世帯のみでなく農家世帯においても食品の加工や貯蔵は外部に依存することが多く、また、調理済み食品やインスタント食品などの加工食品の発展・普及に伴って加工調整の場としての位置づけは低くなってきている。さらに、個食化がすすむなかで家族揃っての食事の場としての役割も減少しつつある。このように、日本の台所の機能は生活状況の変化と共に僅かの間に急激に変化してきた。

中国貴州省西南部の苗族と布依族においても、近代化がすすむなかで食事をとりまく状況の変化の兆しが見えてきた⁴⁻⁷⁾。このような食事環境の変化に伴って、苗族と布依族の台所機能も両民族の変化の度合いに応じた違いが生じているものと考えられる。したがって、両民族の台所空間について、間取、台所の広さ、台所の床と壁の材質、台所の位置、台所の形態などから台所機能の比較検討を行ったので報告する。

方 法

調査対象は前報と同地域の苗族14世帯(平均家族人員6.6名)、布依族22世帯(平均家族人員5.9名)の合計36世帯、調査時期は平成4年3月および7月である。台所空間の機能をみるために次の調査項目を取り上げた。

1. 建築様式
2. 建物の広さ

1) 建物延面積

建物延面積は生活空間の他に、家畜小屋、納屋、穀物倉庫などを含めた面積とした。面積の算定にあたっては、各室の内法寸法を巻尺を使用して測定した。

2) 居住面積

居住面積は生活空間として使用されている面積とし、建物延面積と同様の測定方法によって算出した。

3) 台所面積

台所面積は台所空間として間仕切りされている部屋全体の面積を測定することとした。

3. 建築材料

1) 建物の外壁材

建物の外壁材について木、石、レンガ・漆喰仕上げなどの分類を行った。

2) 台所の床材質

台所の床材質について土、石、セメント仕上げなどの分類を行った。

3) 台所の内壁材

台所の内壁材について木、とうもろこしの茎、石、レンガ・漆喰仕上げなどの分類を行った。

4. 住居の空間構成

1) 部屋数

部屋数は間仕切りされている部屋を数えあげた。したがって、居住空間が間仕切りされずに客間兼居間兼食堂として使用されている場合には、3部屋ではなく1部屋として数えた。また、台所の数についても確認した。

2) 居住形態

各世帯の家族構成から、二世帯同居（核家族のみでなく世帯主の子ども夫婦などの複合家族も含む）、三世帯同居、四世代同居に分類した。

3) 間取

間取は寝室のベッドの下が調味料や漬け物などの貯蔵場所として利用されていたり、穀物倉の一隅にベッドが置かれている場合などもあるので、各室の主要な用途別に玄関、堂屋（客間兼居間）、寝室、台所、食堂、貯蔵室、納屋（倉庫）などの配置を記録した。

4) 台所の位置

台所の場所について母屋（屋内）と別棟（屋外）の区分、および玄関からの遠近を調べた。

5. 台所の環境

1) 窓

台所の窓の有無と大きさについて観察した。

2) 煙突

煙突の有無について確認した。

3) 方位

台所の方位について聞き取り調査をした。

6. 台所の形態

1) 台所の形態

台所が食事の場としても使われているか、食堂が独立しているかの台所の形態の違いについて分類した。

2) 台所空間の使われ方

台所空間の特徴について、かまどや水場などの位置の確認や台所の使われ方などの観察を行った。

結果および考察

1. 建築様式

調査地域の住居の構造は両民族ともに木造の梁架構造であった。建物の重量を柱と梁で支える建築様式であるが、外観は石造のようにみえる(図1)。これは外壁材に石が使用されているためで、家屋の中に入って内側からみると(図2)、太い木材の柱に梁がわたされており、柱と柱の間には貫が通してあって、その間をうめるように大小の石が組まれている様子を見ることが出来る。また、屋根は垂木の上に直接、石あるいは瓦が葺いてあるので、空が透けてみえる所もある。

家屋のほとんどは斜面に建てられていたが、苗族や布依族の村は山合いや山沿いにあって平地が少なく、平地はまず農作物の栽培に優先されることによる。特に、急斜面に建てられている納蟬村、安章村、平岸村など⁴⁾の家屋は、傾斜面にあたる床下部分を家畜小屋などに利用する半高床式住居の、いわゆる吊脚楼(チョウキヤクロウ)であった。

また、本調査地域の南西部にあたる平岸地区の布依族の家屋では高床式住居がみられた(図3)。この高床式建築の担い手は焼畑農耕民ではなく稲作農耕民であるチワン・トン語族である⁸⁾との説もあり、本調査地域の中で高床式住居がみられたのはチワン・トン語族系に属する布依族の居住するこの平岸地区だけであった。しかし、村の家屋がすべて高床式住居ではなく、土間式住居や吊脚楼なども混在していた。なお、田中らが調査した貴州省東南部のトン族の高床式住居では杉板葺



図1 苗族の住居(世帯番号 K6-1)



図2 屋根裏(世帯番号 K4-1)

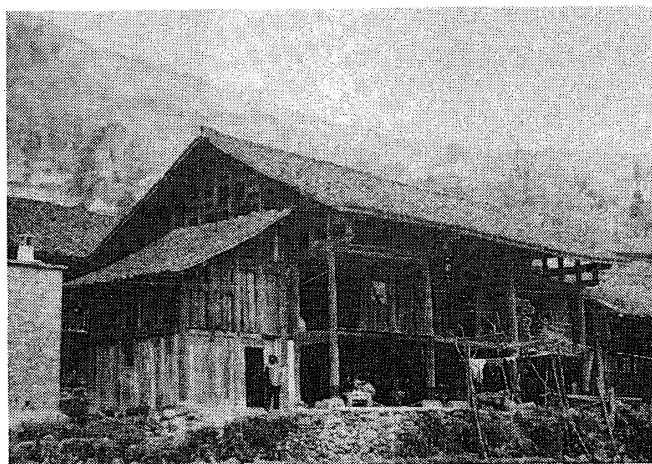


図3 布依族の高床式住居(世帯番号 K2-1)

きの屋根が多かった⁹⁾が、この村ではほとんどが瓦葺きであった。

2. 建物の広さ

1) 建物延面積

建物延面積の世帯平均値は苗族117.0±28.0㎡、布依族138.1±49.7㎡であり、布依族の方が広がった。また、苗族では最も建物延面積が広い世帯は157.2㎡、狭い世帯は62.4㎡であったのに対して、布依族では最大262.0㎡、最小67.9㎡となっていた。このように、最小建物延面積に両民族の差はみられなかったが、建物延面積が150㎡以上の世帯は苗族7%、布依族32%と布依族に建物延面積の広い世帯が多かった。

2) 居住面積

居住面積の世帯平均値は苗族82.2±20.8㎡、布依族100.1±22.8㎡であった。苗族の最大居住面積は125.3㎡、最小居住面積は51.2㎡、布依族では最大148.0㎡、最小67.9㎡となっていた。居住面積が100㎡以上の世帯は苗族14%に対して布依族は41%みられ、建物延面積と同様に居住面積が広い世帯は布依族に多かった。

両民族の家族人員は苗族の方が布依族よりもやや多いので、一人当たりの居住面積についてみると、苗族は12.8㎡、布依族は17.9㎡であり、布依族の方が広がった。これを貴州省農家世帯（漢民族を含む）の1991年の一人当たりの居住面積平均値19㎡と比較する¹⁰⁾と、布依族は貴州省農家世帯とほぼ同じ居住面積であったが、苗族はこれよりも3割ほど狭いことが認められた（図4）。

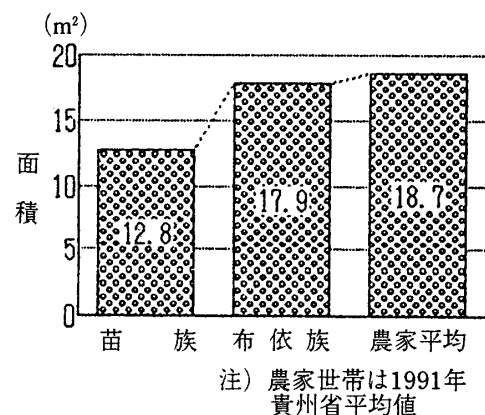


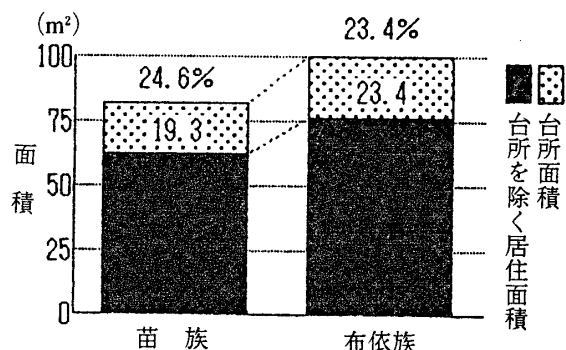
図4 一人当たりの居住面積

3) 台所面積

台所面積の世帯平均値は苗族19.3±9.9㎡、布依族23.4±8.9㎡であり、台所は布依族の方が広がった。苗族の最大台所面積は45.5㎡、最小台所面積は8.7㎡に対して布依族の最大台所面積は44.9㎡、最小台所面積は12.2㎡となっていた。

4) 台所面積と居住面積の関係

居住面積に占める台所面積の比率についてみると、苗族は24.6%、布依族は23.4%となり、両民族ともに台所面積は居住面積のほぼ1/4を占めていた（図5）。苗族の台所面積は布依族よりも狭かったが、居住面積に占める台所比率には両民族に差がみられなかった。



建物延面積	117㎡	138㎡
居 面 積 住	82㎡	100㎡

図5 居住面積に占める台所面積の比率

次に、居住面積と台所面積の関係を示すと、苗族は居住面積、台所面積ともに布依族よりも狭かったので、苗族は左下、布依族は右上に分布していた。また、両民族ともに居住面積が広い世帯は台所面積も広い傾向がみられたが、特に布依族にその傾向が著しかった(図6)。

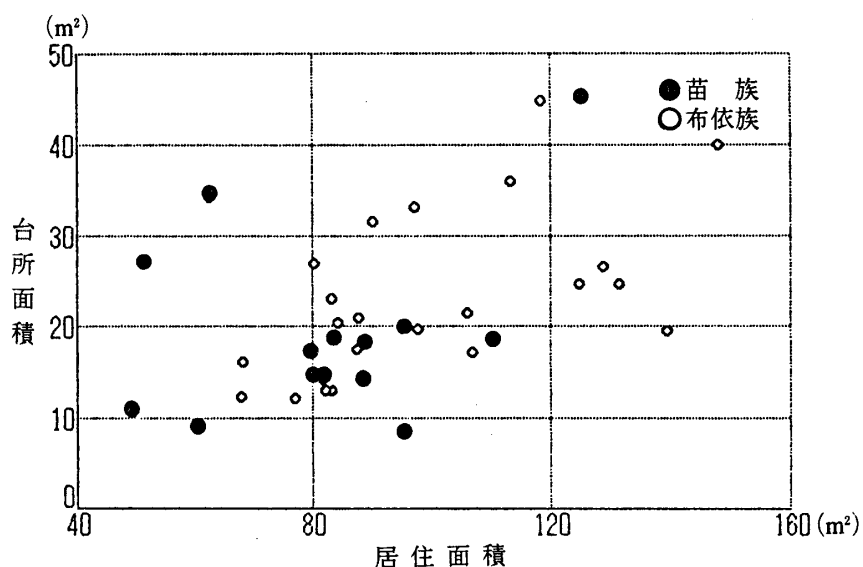
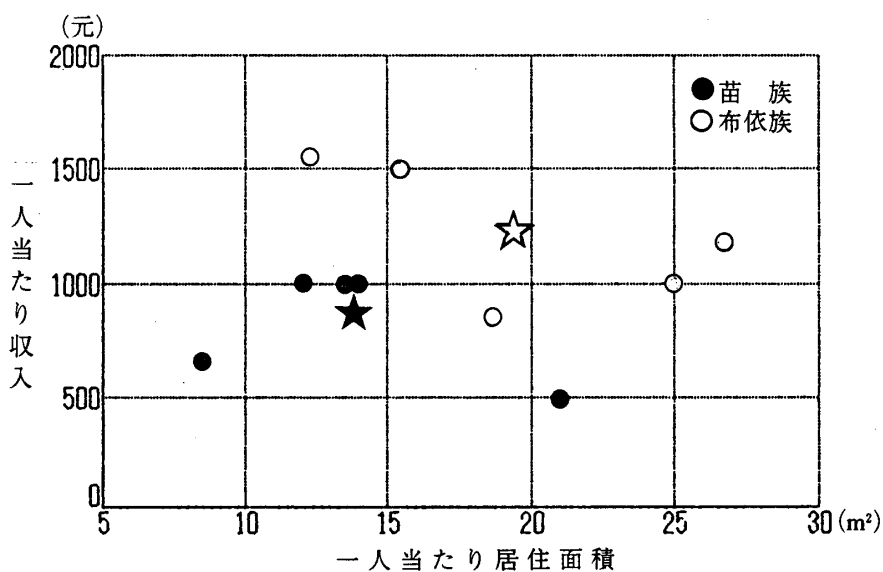


図6 居住面積と台所面積の関係

5) 一人当たりの年間収入と居住面積との関係

一人当たり年間収入と一人当たり居住面積との関係をみると、布依族では収入が多くても居住面積が狭い世帯もみられるが、おおむね一人当たり年間収入は苗族が布依族よりも低く、居住面積も狭い傾向がみられた(図7)。このように、収入が多くなれば居住空間にも余裕ができることを示していた。



注) ★は苗族平均 ☆は布依族平均

図7 居住面積と一人当たり収入との関係

3. 建物の材質

1) 建物の外壁材

建物の外壁材として苗族では石71%, レンガ・漆喰仕上げ29%, 布依族では石50%, レンガ・漆喰仕上げ39%, 木材11%となっており, 両民族ともに石が最も多く使用されていた. 建築費が石材よりも多くかかるレンガ・漆喰仕上げの比率は布依族の方がやや高くなっていた. また, 屋根はほとんどの世帯が瓦葺きであったが, 別棟は茅葺きの世帯もみられた.

2) 台所の床材質

台所の床は両民族ともに90%以上が土であり, 木材や石が敷いてあったりセメント仕上げの床は4世帯でみられた程度であった.

3) 台所の内壁材

台所の内壁材として苗族ではレンガ・漆喰仕上げ37%, 石21%, 木材21%, とうもろこしの茎21%, 布依族ではレンガ・漆喰仕上げ44%, 石39%, 木材11%, とうもろこしの茎6%であった. このように, 苗族では木材やとうもろこしの茎を内壁材として使用している家屋が布依族よりも多く, 布依族ではレンガ・漆喰仕上げの比率が苗族よりも高くなっていた.

4. 住居の空間構成

1) 部屋数

部屋数の世帯当たり平均値は苗族5.9室, 布依族6.1室であった. また, 苗族では最小部屋数3室, 最大部屋数8室, 最頻値5室であり, 布依族では最小部屋数4室, 最大部屋数9室, 最頻値6室となっていた. 一人当たりの部屋数は苗族0.9室, 布依族1.0室であった. このように, 部屋数には両民族の間に差はみられなかった. したがって, 部屋の数ではなく, 部屋の大きさに両民族の住居の違いのひとつがあることを示していた. ちなみに, 部屋当たりの居住面積は苗族13.9㎡, 布依族16.4㎡であった.

次に, 台所の数をみると台所が2つあるのは苗族で4世帯(29%), 布依族で2世帯(9%)と苗族にやや多かった. 中国の農村においては分家することが経済的に困難な場合には親の住まいの一部, すなわち台所を別に設けることが一般的になされており¹¹⁾, 苗族では台所が2ヵ所ある世帯がいずれも三世代同居であるところから, このような意味合いもあるものと推察される.

2) 居住形態

居住形態をみると, 苗族では二世代同居の比率が28.6%に対して布依族では63.6%, また, 三世代同居の比率は苗族が71.4%に対して布依族では31.8%であり, 苗族の三世代同居の比率が有意に高いことが認められた(図8). これは, 布依族では子どもが独立して世帯を構えていることや現金収入を得

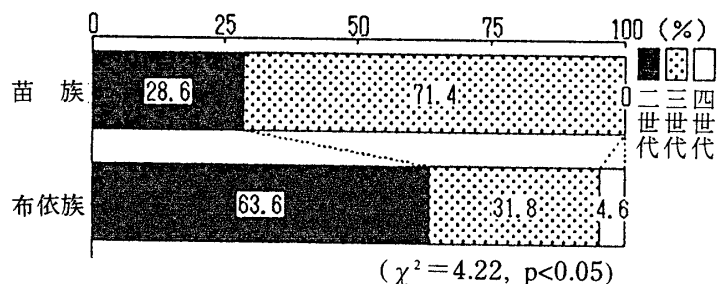


図8 居住形態

るために都市に出ている者が多いことなどによるものと考えられる。

3) 間取

①事例 1

苗族の家屋の間取の一例を示すと、玄関は10m²程度の広さがあって接客空間にもなっている。入り口には高さ40~50cmの木製の敷居があり、この敷居を跨いで中に入った正面が堂屋、いわゆる客間となっており、先祖礼拝用の祭壇が設けられていた。堂屋の両脇間に寝室が4室あったが、苗族では台所の隅にベッドが置いてある世帯もみられた。この事例では台所は母屋ではなく別棟の中にあり、食堂が隣接していた。また、別棟の牛小屋の隣にも小さな台所があり、これは若夫婦が使用していた(図9)。

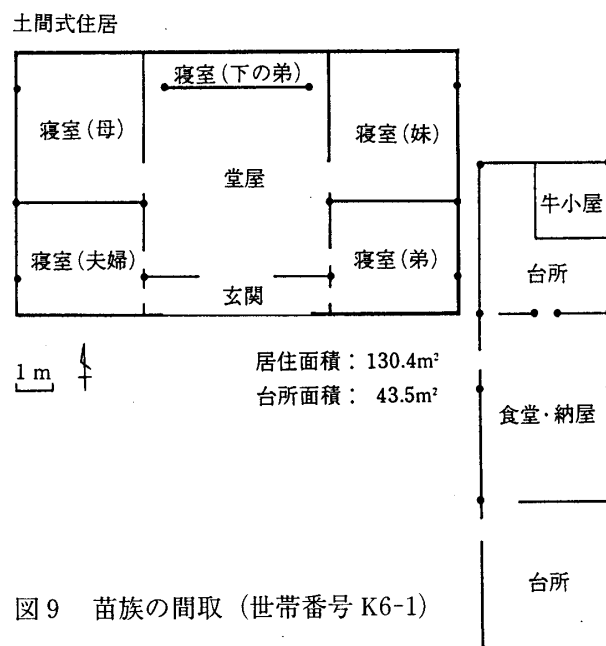


図9 苗族の間取(世帯番号 K6-1)

②事例 2

布依族の家屋の間取の一例を示すと、苗族と同様に玄関を入った正面が堂屋であった。この堂屋の上は吹き抜けになっており、脇間の二階部分には屋根裏部屋があって、穀物類の貯蔵庫として使われていた。また、その一部が寝室にもなっていた。台所は玄関の左脇間にあり、玄関からも堂屋からも出入りができるようになっていた。なお、玄関は木製の観音扉で開閉するようになっていたが、通常は開けたままであった。この扉の上の部分には竹製の網代が使われていたが、これは、屋根裏部屋にある穀物貯蔵庫の通気をよくするための工夫の一つであった(図10)。なお、門構えと中庭のある建物もみられたが、その数は少なかった。

③事例 3

布依族でみられた高床式住居は土間式住居とは異なって生活面が二階部分にあり、一階は豚や鶏などの家畜小屋や納屋などとして利用されていた。大きな丸太の階段で二階に登ると、まず廊下があり造り付けの木の長椅子があった。この長椅子に座って作業をしたり、近隣の人と話しをしたり、軽い食事をするなど、日本の縁側のように使われているようであった。廊下の中央には高さ50cmくらいの敷居のある入り口があり、中に入ると間仕切りの無い広間があり、正面には先祖をまつる祭壇が飾られていた。広間の両隣の台所と寝室は板で仕切られていた。間取図の黒丸印は柱を

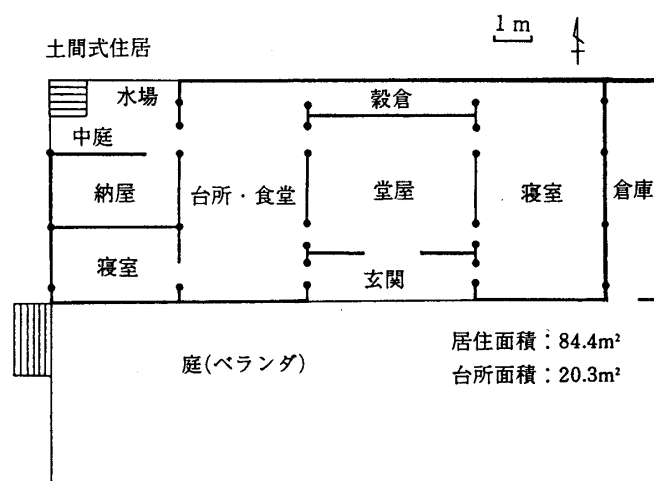


図10 布依族の間取(世帯番号 K5-1)

あらわしており、柱は直径30cmくらいの太いものであった。広間は客間、家族部屋、食堂などを兼ねており、移動式のいろりが置かれていた。このいろりは暖をとるだけでなく、水煮やスープなどの鍋料理の加熱用具としても利用されていた。台所には土間式と同様にかまどがあるが、床が木製であるため木枠の中に土を盛った上に築かれていた。この台所からも一階に降りられるように扉の外に細い丸太の階段が付いていた (図11)。

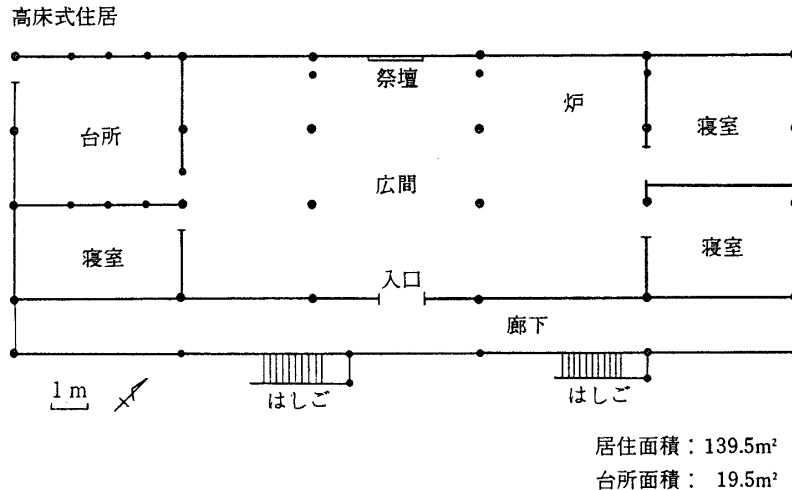


図11 高床式住居の間取 (世帯番号 K2-1)

以上のように、両民族に共通していたのは、木の高い敷居のある玄関を入った正面の部屋が客をもてなす部屋であり、そこには祭壇が設けられていること、堂屋の両脇の部屋は寝室などの私的生活空間になっていることなどであった。このような間取は漢民族の影響を受けている¹⁰⁾といわれており、両民族それぞれの間取の特有性を見いだすことはできなかった。

4) 台所の位置

台所の場所は別棟 (屋外) にある世帯が苗族14%、布依族9%であり、母屋 (屋内) にある世帯は布依族がやや多いものの差はみられなかった。台所の場所を玄関からの遠近からみると、台所が玄関脇の近い所にあるものは苗族60%、布依族50%であった。このように、両民族に台所の位置についての違いは認められなかった。

5. 台所の環境

1) 窓

台所には明り取りの小さな窓が設けられている程度であった。台所には電燈がひいてある世帯が多かったが、昼間は送電されていない村もあって点灯されておらず、採光が不十分であるために、昼間でも台所は薄暗かった。また、風通しもよくないので、台所の匂い、煙、煤などがこもっており、日当たりもよくないので、冬期には土の床はじめじめしていた。

2) 煙突

かまどに煙突がある世帯は両民族ともにほぼ30%で煙突のない世帯の方が多かった。また、燃料には石炭、とうもろこしの芯などが使われていることもあって、灰や煤、油煙が多く、台所の壁や調理道具類などは汚れやすい状況にあった。

3) 方位

台所の方位は両民族ともに北西向きがやや多いものの一定の傾向はみられなかった。これは調査地域の村が山合いや山沿いに建てられている家屋が多いので、方位を考慮して建てる余裕がないものと思われる。また、方位に対する意識が漢民族や日本人ほど高くないことなどが考えられる。

以上のように、台所環境の特徴として薄暗くて風通しがわるく、冬期は湿気が多いことがあげられた。日本の戦後間もない農家世帯の台所も「すすけて暗く、だだっ広くて働きにくく、収納空間もなく整理のわるい、そして水くみが不便で非衛生的、能率のわるい台所」であった¹⁾といわれていたように、苗族や布依族の台所環境と類似している面もあった。しかし、苗族や布依族の台所空間には、収納の工夫がなされていたり¹²⁾、効果的なかまどの利用¹³⁾や食品が加工調整できる台所の広さがあるなどの利点もみられた。

6. 台所の形態

1) 台所の形態

両民族の台所の機能の一つとして日常の食事の場として台所が使われているか否かについてみると、台所と食堂が兼用となっている世帯は苗族85.7%、布依族68.2%であり、食堂が台所と独立している世帯は苗族14.3%、布依族31.8%と、台所と食堂の兼用世帯は布依族よりも苗族に多い傾向がみられた(図12)。

また、台所の形態と台所面積との関係を見ると、食堂が独立している世帯の台所面積は苗族15.5m²、布依族15.9m²に対して台所と食堂の兼用世帯は苗族17.4m²、布依族19.6m²であり、両民族ともに食堂が独立している世帯は台所面積が狭い傾向にあった。

2) 台所空間の使われ方

台所空間の使われ方の特徴を見ると、台所はかまどを中心として水の貯蔵容器がその近辺にあるのが基本的な配置となっていた(図13)。台所の出入り口は水の搬入のために外に出やすい場所と客間または居間に通じるように2ヵ所

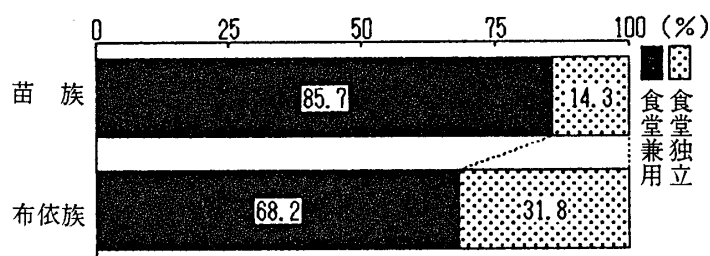


図12 台所形態

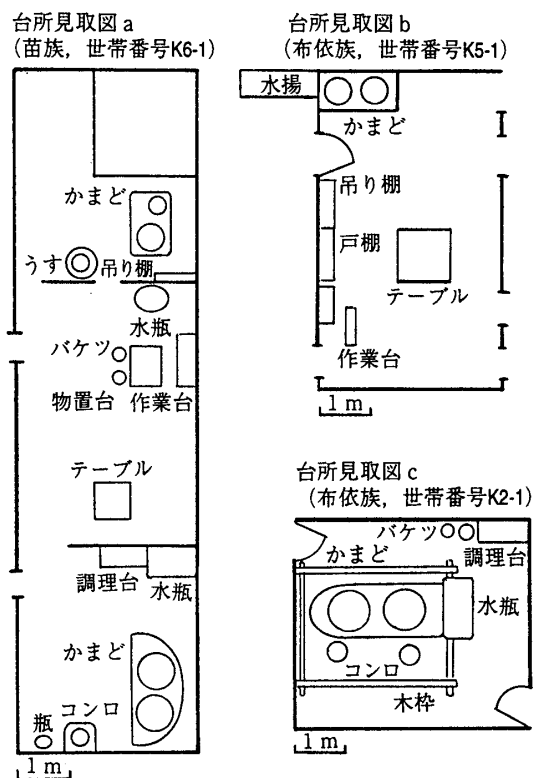


図13 台所の見取図

以上ある世帯が多かった。また、台所の隅にはさまざまな臼があって食品の調整や加工に使われ (図14)、調味料、漬け物、酒などの瓶が貯蔵庫だけでなく台所にも並べられていた (図15, 16)。かまどでは調理とともに料理の盛りつけも行われ、日常の食事はこのかまどの前で食べたり、コンロを囲んで食べたりしていた。このように、台所は食にかかわる多目的空間として機能しており、食品の調整加工にはじまり調理、盛りつけなどの食事作りの一連の操作が行われる場であるとともに、調味料や漬け物などの加工食品の貯蔵場所、さらには食事の場にもなっていることが両民族に共通していた。

なお、台所や穀物貯蔵庫にベッドがあるなど「食」と「寝」の部屋が兼用されている住居がみられるが、これは居住空間が合理的に使用されているというよりは、居住面積が狭いことに一因があり、居住面積が広くなれば、部屋の用途に応じて分化していくものと考えられる。

以上のように、布依族は苗族と比較して、食べる場を独立させて食堂を設けるという形で台所の機能の一つが分化しつつあると考えられた。また、布依族では肉、豆腐などの購入食品の比率が苗族よりも高いこと⁵⁾、すなわち自給自足から食品購入へと移行する兆しがみえることなどから、台所の機能は苗族よりも布依族において変化しつつあることが示唆された。

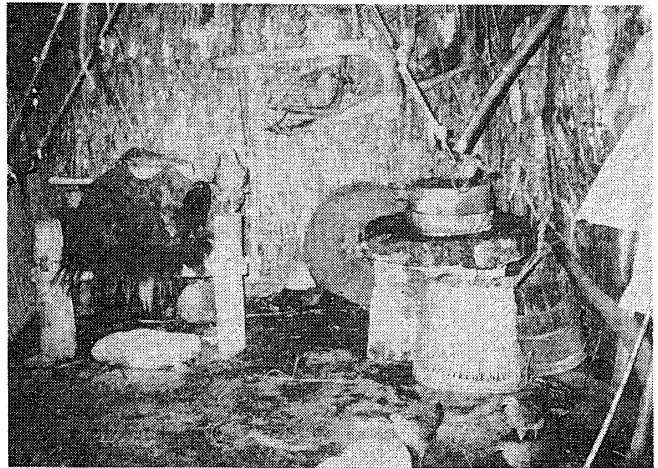


図14 台所風景. 外壁材はとうもろこしの茎 (世帯番号 T1-1)



図15 台所風景. 外壁材はレンガ (世帯番号 T8-1)



図16 台所風景. 外壁材は石 (世帯番号 T3-1)

ま と め

中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化について、台所空間から台所の機能をみた結果は次のとおりである。

1. 台所は両民族ともに調整加工、調理、盛りつけ、食品貯蔵、食事の場など多面的な機能をもつ空間となっていた。
2. 苗族と布依族の台所面積を比較すると、苗族は布依族よりも台所面積は狭かったが、居住面積に占める比率は両民族ともにほぼ1/4であった。台所面積は居住面積とほぼ比例しており、年間収入が多い世帯ほど居住面積が広い傾向がみられた。
3. 苗族は布依族よりも三世代同居の比率が高く、台所と食堂を兼用している世帯が多い傾向にあった。これらのことは台所の機能が苗族よりも布依族において変化しつつあることを示唆していた。

(本研究は名古屋女子大学生生活科学研究所の機関研究としてまとめたものである。)

参 考 文 献

- 1) 山田幸一他：台所のはなし，pp.2～3，pp.89～91，鹿島出版会（1990）
- 2) 宮崎玲子：世界の台所博物館，pp.8～16，柏書房（1988）
- 3) 山口昌伴他：食の文化フォーラム 家庭の食事空間，pp.17～241，ドメス出版（1989）
- 4) 八田耕吉，孫 漢董，謝 立山：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(1) 自然環境，名古屋女子大学紀要，**40**，111～123，（1993）
- 5) 内島幸江，平野年秋，南 広子，胡 国文：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(2) 食品の使用状況，名古屋女子大学紀要，**40**，125～135，（1993）
- 6) 南 広子，平野年秋：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(3) 供応食，名古屋女子大学紀要，**40**，137～144，（1993）
- 7) 酒井映子，末田香里，内島幸江：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(4) 日常の食事，名古屋女子大学紀要，**40**，145～153，（1993）
- 8) 佐々木高明他：照葉樹林文化と日本，pp.210，くもん出版（1992）
- 9) 田中 淡他：住宅建築，中国・貴州省の高床住居と集落，**181**，4～39，72～105，建築資料研究社（1990）
- 10) 中国農業年鑑1991年版，pp.442～454，農業出版社（1991）
- 11) 浅川滋男：カマド神と住空間の象徴論，季刊人類学，**18**，4，（1987）
- 12) 末田香里，酒井映子，南 広子：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(11) 台所用具，名古屋女子大学紀要，**41**，259～266，（1995）
- 13) 南 広子：中国貴州省西南部の苗族と布依族の食文化(12) 火まわり，名古屋女子大学紀要，**41**，267～275，（1995）